![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成３１年４月号（20190412）

園長　平澤　正則

子どもが親に望むもの

　虐待などのニュースが最近多く聞かれます。中には，我が子を死まで追い込んでしまった親もいます。親が悪い，児童相談所が悪い，近所等地域が悪いと様々な議論があるようですが私がここで言いたいことは，それでも子どもは親から逃げ出さずに最後まで親の元にいたのは何故なのか，ということです。小学生くらいになれば子どもたちは会ったこともない大人に暴力を受ければ必ず逃げ出そうとします。一刻も早く，隙を見つけて逃げることが幼い彼らにももち合わせた本能の中にあります。では，なぜ逃げなかったか。最後まで，助けてくれると信じていたのか，信じたかったのか，あるいは，目の前にいる親以外には助けてくれる，頼れる大人が他にはいなかったということだったのでしょう。いずれにしても親から離れることは考えられなかった，あるいはできなかったのです。それくらいに親という存在は子どもにとって大きなものであり，絶対的なものであり，生後数年であれ社会的な生き物として成長してきた子どもにとって，親にとって替われる存在は他にいません。

　さて，そのように弱い存在である幼児や少年少女たちが親に望む最大のものは何なんでしょうか。

それは日々の食事をはじめとする衣食住の確保であると思いますが，しかしこれらについては我が子を殺めた親でさえ全く与えなかったというわけでもなさそうです。では何なのか，お気づきのように，「愛」という言葉に代表される子どもへのいたわり，慈しみです。親と子の間に育まれるこれらのものは所得する金銭・物品の多少には全く影響を受けないといって過言ではないでしょう。全くというと抵抗を感じる人がいるかもしれませんが，しかしそれに近いくらいのものです。

　私事になりますが，幼いころの我が家は本当に貧乏でしたが，それが悲しかったとか，苦しかったとか，恥ずかしかったなどという記憶は一切ありません。幼稚園にも保育園にも行けませんでしたが商売をしている親の近くで毎日勝手に遊んでいることに何の疑問もなく何の不足もありませんでした。否，腹が減ったとか，今日は違うものを食べたいとかのわがままはあったと思います。その度に親にはつらい思いをさせていたとしても，子どもとはそういうものですし，親が過度に悲嘆すべきことではありません。

　まさに今子育て中の保護者の皆さんには，そのことを忘れずに子どもと向き合ってほしいです。つまり，今ある生活に満足し，不満を言う前に改善の道を求めること。その時子どもは邪魔な存在ではなく，自分たちに潤いを与えてくれる存在であるということ。あれが欲しい，これが欲しいなどと子どもが言っているのはそれを言わせている親にまだ余裕があるということ。幼児が金銭や物品に不満をもつことは少なく，第一の不満は，親に自分の本当の姿を見てもらえないこと。思春期くらいになると我が家の生活を他と比べるようになり，悲しいとか恥ずかしいという感情に芽生えますが，金銭の多少に関係した事象により他をうらやむことは多々あるにしても，それによって親を怨むとかさげすむなどということはないと大勢の子どもたちを看てきた経験上感じます。

　親も子も互いのあるがままの姿を受け入れながら苦労の道を共に歩んでいくならば，ささやかな満足とともにかけがえのない年月が築かれていくことだろうと思います。